

“非定型流動形”をはやらせる

法政大学教授 田村 明



ており、たまたま横浜市の全体的な戦略計画を立てた。私の住いが港の見える山下公園の前にあったため、横浜をすっかり気に入っていたところ、計画を全部実行するため新しく企画調整室を作るといので、その企画調整部長として十五年ぶりに再び公務員生活に入った。

私は、大学を出てすぐに運輸省に一年半ほどお世話になった。大学を何回か卒業した関係で、そのほか大蔵、農林、労働、建設などの各省に採用して頂いたが、結局は、その後民間会社に勤めた。それも数万人もいる大会社と十人足らずの小さい事務所を経験した。

民間から公務員になるのは大変でしょうと言われたが、いろんな場を体験しており、あまり民間、公務という差は感じない。民間の中でも役所以上に官僚的なのところがあったりする。役所に入るといよりも、私の志した総合的で実践的な都市づくり計画を実行してみたいという気持であり、それができる場なら、どこでも変わりはない。

そうは言うものの、私の部は全く新しく生れた組織であり、スタッフも各部署の現場から集まり、総合的な都市づくりという意味はほとんど理解していない。そこに、これまでの枠を取り外して新しい考え方を入れ、前例などにとらわれず、市全体の立場に立ちヨコ割りです仕事をしよこうというのだから大変である。「こうできないか」というと大抵は「できない」という答えばかり返ってくる。一方、都市問題は遠慮なく発生する。どこかでこの状況を変えなければならぬ。後に「非定型流動形」という言葉をはやらせたが、問題解決のためには、これまでの固定的な枠にとらわれず、自由に発想し、行動し、実施してゆく外はない。

そのため、いくつかの仕組みを考えた。まず目を広く持つこと。横浜全圏の航空写真と、日本列島立体地図と地球儀を購入した。当時、財政局では自治体にどうして地球儀が必要かなどと言ったそうである。また特大の大製図版をこしらえた。議論は口で言うだけでなく、すべてこの上で字や絵で書く。その上、ここを取り囲んで日に一度は全体会議、目標会議を開く。だんだん人員もふえて分けてやらなくてはならなくなったが、とにかく大テーブルを囲んで全員が集まる。そして役所序列でなく、この席では平係員でも実際に仕事をしている人が中心になって発言するのである。

昨年まで十三年間、ずいぶん乱暴に仕事もしたが、日々新しい方法を考え実践する楽しい日々であった。あの頃の若い人々が、今、立派な中堅幹部になっている。さらに、次の若い人々を育ててくれることが願いである。